

ふと肌寒さを感じて目をさます。まばらに日の射す公園のベンチ。時計に目をやると時刻はもう5時を回っていた。

「眠ってたのか…」

あれから二時間近くが経っていた。

(考え疲れて寝こけるなんてガキかよ)

自嘲的な笑いを浮かべる。太陽はすでに傾きかけていた。

夕焼けは子供のころを思い出させる。家から徒歩で二十分のこの「公園」。毎日のように夕暮れまで遊んでいた。あいつと一緒に――。

「カズくーん、あっそぼー！」

今日も鳴り響く元気な声。また来たのか。

「あら、優希ちゃんが来たみたいよ。毎日毎日仲がいいのねえ。」

そういつて笑いかける母。

「べつに優希が特別なかよしなわけじゃないよ。あいつがいつもよびにくるから…」

「はいはい、あんまり遅くなっちゃだめよ。」

「だから聞いてって…」

「カズくーん！」

「ほら、優希ちゃん呼んでるわよ。」

「わかったってばー！」

「カズくんおーそーいー」

「いつも急にくるからだよ。」

「えー、毎日きてるじゃんかー」

「毎日きててもだめなものはだめなんだよ。」

「ええー」

「あー！もうこんな時間になってる！カズくんはやくー、時間なくなっちゃうよ！」
一人で駆け出していく。

「もー、しょうがないなー」

そんなことを言いながら優希を追いかけるのが当時の俺の日課だった。

このころの俺は、なにも優希ばかりと遊んでいたわけじゃない。近所の子とも一緒に野球や鬼ごっこなどをして遊んでいたし、それなりに仲もよかった。俺自身もそれを楽しい

と思っていた。

だけど。それでも優希は俺にとって特別だった。実はうちの近くにはもうひとつ公園がある。家から西側、住宅地に囲まれた、多くの子供の集まる公園。他の子たちと遊んだりするのは大抵この場所だった。ブランコや砂場、いろんなもの、いろんな子がいて退屈しない、楽しいところ。優希とも始めのうちはこの公園で遊んでたんだっけ。

ある日優希がこの町内を探検しよう、とやってきた。いつも行く場所がその公園だったから、それとまったく逆の方についてみよう、と言い出したのだ。もちろん俺はしぶったが、いつものとおり、強引な優希に引っ張られる形でその「探検」に付き合わされることになった。家から出て、東の方角へ進むと、程なく俺たちは探検にはおあつらえむきの山を見つけその中へと進んでいった。

今になってみればたいした道のりでもないのだが、そのころの俺たちには大した冒険のように思えるくらいだった。木々は手入れがされていないのか差し込む光もまばらで、辺りは湿った土の匂いで満ちていた。そんな中、道なき道を二人進んでいった。

やがて頂上にたどり着くと、そこは開けた広場になっていた。見下ろせばすぐそこに広がる、自分たちの暮らす町、だけど「そこ」と「ここ」は雑木林によって隔てられている。

そんな風景に妙な達成感を覚えて二人しておおはしゃぎしたのだった。もっともその後、少し外れた場所に下まで一本道で下りられる階段を発見したときはそれ以上に大笑いしたが。

そんなこんなで見つけたこの新しい「公園」はすぐに二人のお気に入りになった。ここは町の人たちにはあまり知られていないらしく俺たち以外の人がかかることはほとんどなかった。もちろん他の子供たちが遊びにくることもなく、ちょっとした秘密基地を手に入れたみたいで嬉しかったのだ。ここには気の利いた遊具なんてものはなかったが、広場を駆け回ったり、森で色んな花を見たり、虫を追いかけたりと飽きることがなかった。何より、なんにでも目を輝かせて飛び込んでいく優希と一緒にいた時間は、こっちまで引き込まれてしまって、いつのまにか自分自身も夢中になっていた。優希という時は他のどの友達と一緒に遊んだ時よりも心がはずんでいた。もっとも当時の僕はそれを否定していたけれども。

あれから随分と時間がたったがこの様子はほとんど変わらない。しいていえば少し小さくなった気がするくらいだ。

ところで、この「公園」にはほとんどなにも置かれていないが、二つだけ人工物がある。ひとつは今俺が座っているこのベンチ。そしてもうひとつはその頭上を彩る藤棚——。ここはこの「公園」の中でも一番のお気に入りだった場所だ。

学校のある日は授業が終わってからでないと公園には行けなかったが、休みの日には時には朝から出かけて遊びまわった。そんな時は母にお弁当を作ってもらい、お昼時には優希と二人してこのベンチで食べたのだった。まるで遠足に来たみたいだとはしゃぐ優希に、いつも来ているところじゃないかと口では言いながらも、内心は楽しい気持ちでいっぱいだった。お弁当、といたらおかしい思い出がある。

ある休みの日、俺たちは朝から公園に出かけて遊んでいたのだが、珍しくケンカをしてしまった。原因は手を繋ぐか繋がらないかなんてことだった。それまではいつも優希に手を取られて引っ張られるような形でつないでいたのだけれど、子供心に気恥ずかしくなって、その手を振りほどいてしまったのだった。たいていのは気にしない優希も、この時は頑として譲らなかったの、結局公園に着いても仲直りできず、俺はベンチに、優希は離れたところで一人遊んでいたのだった。

時間は過ぎてちょうどお昼。せっかく作ってもらったお弁当も一人だと食べる気がおこらなかった。頭上の藤は見事に咲いていたが、甘やかな香りもこのときはなんだか鬱陶しく感じられたのを妙によく覚えている。何もする気にならずベンチに横になっていると、今まで離れたところにいた優希がこっちに寄ってきた。気づいて起き上がったものの、何と声をかけていいかわからず、気まずくなって俺はそっぽをむいた。優希は俺とは逆のほうを向いたまま隣に腰かけた。

「…」

「…」

続く沈黙。

でも、それを破ったのは優希だった。

「…ねえ…」

「…なんで手をつなぐの、…っ、いやなの？」声が震えている。

「…」

「…わたしのこと、…っ、きらいになったの？」

「な、泣くことないだろ…」あわてて言う。

「…」

「…そうじゃ、ないけど…」

「…じゃあ、どうして？」

「…」

「…」

「…僕はおとこのこで、優希はおんなのこだろ…」

「うん…」

「…だから、その、手をつなぐのはいやっていうか…」

「手をつなぐの、いやなの？」

「いや、そうじゃなくて、へんっていうか…」

「手をつなぐの、おかしいの？」

「じゃなくて、えっと…その…」

「…はずかしいんだよ…」

「手をつなぐの、はずかしいの？」

「…うん」

「なんで？」

「だから、その…手もあたるし…」

「わたしは手があたってもきにしないよ？」

「だから、優希がきにしなくても僕がきにするの」

「ええー、じゃあどうすればいいのよ？」

「どうするっていつでも…」

「うーん」

「じゃあわかった、手があたらなければいいんでしょう？」

「うん」

「うーん」

「あ、そうだ、じゃあ…」

そうやってなにやら鞆の中を探し始める優希。やがてお弁当箱を取り出しその中にある
おかずの一つを取って

「はい、カズくん」

と差し出した。

「え、はい、って…。これ、なに？」

「ちくわだよ。カズくん知らないの？」

「それはわかるけどこれがどうしたの？」

「だからこれでー」

「これで？」

「こうしてー」 そうやって自分の指を竹輪に突っ込む。

「こうして？」

「で、カズちゃんもおんなじに反対がわからいれたら、ほら！」

「ええっ！」

「ほら、これなら手があたらなくてつないでるのといっしょでしょ？」

「ええ？うん、まあ…」

「これならはずかしくないよね！」

「ええっと」

「じゃあいこう、カズくん！」

「ちょっとまってってば…」

こんな風に訳が分からないまま仲直りしてしまって、そのあとはいつもどおりに雑木林の中をかけまわったりして遊んでいたと思う。ただ次の日からは結局二人で手を繋ぐことになったんだけど。竹輪で手を繋ぐ方がよっぽど恥ずかしいからって理由でそうになったんだけど、他にも何かあったような気がする。何があったんだっけ。はっきりと思い出せない。でも少しだけ覚えている。たしか“ずっと友達”とかそんな感じの——。

「ずっと、か——」

次第に赤を濃くする空をながめながら、ぼつり、つぶやいた。

夕焼けは子供のころを思い出させる。日が暮れるまで遊んだいたあの頃のことを。

夕暮れ時になるとこの公園からは、俺たちの住んでいる町が傾き沈んでいく太陽に照らされて茜色に染まっていくさまが見える。子供のころからずっと見てきた、どこか幻想的な光景。でも、それは同時にひとつの合図でもあった。

夕焼けは子供のころを思い出させる。それは終わりの合図。どんなに一日楽しく遊びまわっても、夕暮れが来たらそこでおしまい。一緒に遊んだ友達ともさよならしないといけないお別れの時間——。

視線を下げて町を見下ろせばあの日と変わらない茜色の町。そう、どんな楽しい時間にも終わりはやってくるし、どんなに親しい人とでも別れの時はくる。

また空を見上げようとして、不意に気づく。

「…カズくんもここにいたんだ…」

見れば階段を上ってきた優希の姿があった。

「何、してるの？」

「…。…ちょっと考え事。」

「そうなんだ。」

今日、はじめて知った。

優希が他の町に行ってしまうこと。

優希の家族の事情だから詳しくは知らないけど、どうやら優希のおばあちゃんが体を悪くしてしまって、その看病のために引っ越すことになったらしい。

いきなりのことに俺はどうしていいかわからず、そのことを話してくれた優希から逃げてきたのだった。

「実はわたしも。考え事してて、いつのまにかここにきちゃってた。」

「そっか。」

「うん。」そう言って優希は俺の隣に腰かけた。ふわりと香る藤の匂い。優しい、いつもの雰囲気。

「…」

「…」

何か喋らないと、と焦っても一向に話題が見つからない。いつも一緒にいた場所なのに、いつものような言葉がでてこなかった。

沈黙を破ったのは、やっぱり優希のほうだった。

「ねえ、カズくん覚えてる？昔ケンカしちゃった時のこと。ちょうど今みたいに二人とも黙っちゃって。どうやって仲直りしようかってすごく悩んだんだよ。」

「…ああ、覚えてるよ。結局優希の方から声かけてきたんだっただよな。」

「手を繋ぐのが恥ずかしいからって、ケンカになったんだっけ。カズくんは変なところで頑固だよな。」

「変って…。そのあと優希は竹輪を持ってきて仲直りしようとしたじゃないか。これなら手が当たらないから恥ずかしくないねって。そっちの方がよっぽど変わってるよ。」

「あはは、そうだったね。」

くすくすと笑う声。

「じゃあ、仲直りした後のこと、覚えてる？」

「えっと…、竹輪で手を繋ぐ方が恥ずかしいことに気付いて結局はもとにもどったってこと？」

「それもだけど、わたしが言いたいのはその前の方かな。」

しかたないなあ、とでも言いたげな顔をして。

「カズくんが聞いたんだよ、仲直りした後すぐに。なんでそんなに手を繋ぎたがるのって。」

そう言われると聞いたような気がしないでもない。

「わたしはこう答えたんだよ。だって手を繋いでたら離れ離れになることもないじゃないって。わたしたち、ずっと一緒だから、って。」

確かに言われた気がする。ずっと一緒——。俺はそのあと…

「それで聞いたんだよ、それが理由じゃダメ？って。そしたらカズくん、いつもみたいに…」

しょうがないなあ、って言ってくれたんだよ。

ふっと寂しそうに空を見上げる。

「わたしたち、離れ離れに、なっちゃうね。」

しょうがないよ、と言おうとして声が出なかった。手紙を書くから、とか電話するから、とかそんな気の利いた言葉も出てこようとしなかった。

「藤の花言葉って知ってる？」

唐突な問い。

確か一度聞いたことがあったはずだ。

「陶酔…だったか。」

「…うん。覚えてたんだ。」

陶酔——。確かに酔っていたのかもしれない。これまで一緒に過ごしてきた日々に。甘くて優しい藤の香り。その香りにも似た、優しく暖かい、幸福な時間。ずっと続くと思っていた、当たり前のように。それがどれだけ貴重な時間だったか、夢の覚めた今になっ

て気づく。滑稽な話だ。

優希も俺みたいに後悔してるんだろうか。

「今回のこと、わたしも急に聞かされたんだ。だからうまく気持ちの整理ができなくて、カズくんにも、どうやって伝えるか迷って、どうしようって…。」

「カズくんがそのことを聞いて、どっかに行っちゃった時に思ったんだ。このまま終りになっちゃうのかなって。ずっと一緒って言ってたのに。」

「今更になって今まで一緒にいた時間が大事に思えて——」

後悔、したんだろうか。

「だから今までカズくんと一緒にいったところ、ずっと回ってたんだ。町の中、探検したところ、全部。それで最後になってここにきて、そしたらいつものベンチにいつもみたいにカズくんがいて…。それで、気づいたんだ。」

こっちをみつめる優希。目は少し赤くなっていたけど、涙は見当たらなかった。

「藤の花言葉は陶醉。でも他にもあるんだ。」

「それはね、歓迎。誰かを暖かく迎え入れてくれる、そんな花言葉。」

「ねえ、わたしたちの手、まだ繋がってるのかな？」

ふっと手を見つめながら

「私、思うの。たとえ距離が離れちゃっても心はその人のことを覚えていれば人は繋がりがあえるって。」

「きっと私たちの手は今も繋がってる。これからも、ずっと。」

「だから…」

「だから、待ってて欲しいの。また私がここに戻ってくるまで。戻ってきてまた一緒にいられるように。迎えて欲しいの、いつもの、この藤の下のベンチで。」

ダメ——？

「…いつもだけど優希はほんとに強引だよな。戻ってくるっていつになるかもわからないのに。そんなの毎日公園に来いっていつてるようなもんだよ。」

「…うん。」

「まったくもう…。」

「…しょうがないなあ——」

「…うん。」

「待ってるよ、きっと。ここに帰ってくるの。」いつまでも、この藤棚の下で。

「…っ。…うん。」

「約束。」

「……っ……。」

「でもひとつだけ俺からの約束も守ってほしい。」

「…。」

「俺たちまだ繋がってるんだ、だから。また今度会う時、笑っていられるように。」

「…うん。」

きっと戻ってきた時には。いつも二人を包んでくれた藤の香りみたいに。優しく、暖かく迎えてみせるから。だから。

笑顔で、お別れ。

約束だよ。

「うん。」

夕焼けは子供のころを思い出させる。それは楽しい時間の終わりを告げる合図。友達ともお別れしないとイケない。

けどそれは。そのときの言葉は。

「きよなら」じゃなくて

「またね」だったはずだから。

だからまた会う日まで。

笑って、お別れ。